

論 文 要 旨

「《S/N》(1994)における古橋悌二」

竹田恵子

本論文の目的は、芸術家集団「ダムタイプ」(dumb type)によるパフォーマンス《S/N》(1994)が、少数者が自らのアイデンティティを公にする「カミング・アウト」(coming out)として創作されたという立場から、《S/N》というカミング・アウトとしての「アート」が、当時の社会的文脈においてどのように有効に働くと考えられるのか明らかにすることである。さらに、《S/N》創出に寄与した者が《S/N》においてどのように機能しているのか明らかにすることである。本論文で対象とするのは、《S/N》と古橋悌二 (Teiji FURUHASHI 1960-1995) である。古橋悌二が1992年10月に、HIV陽性であることをダムタイプ・メンバーを含む友人に告げたことが、《S/N》創作に影響を与えた。

研究方法は、《S/N》のシーン分析を行うために、《S/N》パフォーマンス記録映像(1995年、高谷史郎編集)、補助的にシアター・アーツ創刊号に掲載された「パフォーマンス/テキスト#1」、ダムタイプ・メンバーへのインタビューを用いた。また《S/N》創作の同時代的な思想的背景を探るために当時の「ニュー・アカデミズム」に関する書籍や雑誌記事を分析した。さらに、《S/N》創作と同時期の90年代日本におけるHIV/AIDSをめぐる状況を知るために、新聞・雑誌記事や旧厚生省の資料、関係者に対するフィールドワークとインタビューの手法を用い、エイズに関する言説において社会的な差異がどのように形成されているか分析を行った。さらに、《S/N》創作過程を調査するために、ダムタイプ・メンバーへのインタビューを行った。

作者についての問題を論じる際、既に、単一の特権的な個人としての作者概念が問題視されて久しい。ダムタイプ自身も集団的創作(コラボレーション)の手法を用いている以上、単一の特権的個人としての作者という概念からは距離を置いているように見える。しかし、さらに詳細に創作過程や作品を調査すると、《S/N》における「作者」に関して論じるには、単に非特権性や複数性を指摘するだけでは不十分であることが判明した。また、《S/N》創作の社会的文脈から見た場合、HIV陽性者であることを友人に知らせて以降、創作が本格化した《S/N》がHIV/AIDSやセクシュアリティをめぐるカミング・アウトの側面から見ても一定の意義を持っていたと筆者は考える。

次に結果を述べる。《S/N》における古橋悌二は、カミング・アウトや「作者」の側面において、作品やカテゴリーを統合するシグナルとなりながらも、他方ではその統一性を不安定化させるノイズとして機能していることが明らかとなった。

はじめに《S/N》における「作者」の問題について説明する。《S/N》における、引用の様態を調査した結果、《S/N》では、複数のプロットに沿って引用部分と非引用部分と組合されながら構成され、それらのプロットに沿って類似部分が反復、発展するという作品の構造が確認できた。さら

に《S/N》創作過程を精査すると、古橋悌二が台詞や引用部分の選定に関する最終的な決定権を持っていたことが判明した。ミシェル・フーコーによる四つの「作者の機能」を援用し、分析したところ、古橋悌二は作品産出に関わった諸主体のうちの一つであるのと同時に、調査不可能であった一つを除く三つの作者の機能を集中させていた。これらの事実から考えると、古橋は作者の機能を用いて作品を統合する存在である。しかし集団的創作の面からみれば、また異なった一面が見えてくる。ダムタイプは作者という個人の特権的な存在を否定して、集団的創作によって生み出される異質性・他者性を利用しようとしていたと考えられる。しかし、字義通りの多数性では逆に均質な多数性を招いてしまうのみである。そこで、古橋悌二はある種の特権性も持ちつつも、既存の特権的な個人の作者とは異なった方法で作者機能を補填し、異質性・他者性を生み出す存在となることになる。ここでも、古橋はある種の特権性を持ち《S/N》を一定の秩序で結ぶ存在、シグナルであるが、同時に集団的創作としては異質な存在であり、ノイズであるという、両義的な存在であった。

次に《S/N》におけるカミング・アウトの側面について説明する。カミング・アウトは少数者が行う政治的実践であるが、固定化したカテゴリーに自らを表象することで、自らの豊かな生の在り方を縮減させられてしまう問題点、＜主体化＝従属化＞の罣が存在した。その問題点を解決しようとしたのが《S/N》であった。性的接触により HIV に感染した「男性同性愛者」がほとんど可視化されていない状況において、オープニング・トークで自らを「HIV 陽性」で「ホモセクシュアル」だと表象するテイちゃん（古橋悌二）は、カミング・アウトを行っている判断できる。しかし、自らのアイデンティティ・カテゴリーを衣装表面の上からラベルで表象する形を取ることにより、本質化された、一義的なカテゴリーを否定しようとしていた。また、シーン 5 において、パフォーマーで「ろうあ者」のアレックスは、カテゴリーにとらわれない自己の在り方を宣言したが、その発話の音声を示す意味を観客が認識することは、難しい。これらの事実から、《S/N》は一義的・固定的なカテゴリーを否定し、意味領野にノイズを溢れさせようとしていると考えられた。しかしシーン 5 においてアレックスが述べる台詞は、古橋が考案したものであった。そしてアレックスの発話と同時に舞台装置に投影されることで、意味の認識が容易になる。古橋の考案した台詞はカテゴリー、ひいては言語から逸脱し、観客にノイズとして処理されるかもしれないアレックスの発話を、意味を確定できる領域につなぎとめている。

言語によるカミング・アウトと対比したとき、《S/N》においては、いくつかのカテゴリーに固定化せずに、自分自身の存在のあり方を伝達できる。さらに《S/N》は、カテゴリーや言語に縛られないとはいえ、意味が見いだせない混沌の状態にはならず、固定した意味を伝達できているという点で、観客とのコミュニケーションを成り立たせることができている。これらが、カミング・アウトとしての《S/N》が有効に働くと考えられる点である。そして、カミング・アウトとしての《S/N》は、固定化した意味を伝達できるゆえに、ある共同性を立ち上げ、そこに観客を巻き込むことで、流動的で一時的に生じる新しい「コミュニティ」を醸成する可能性がある。

古橋は《S/N》の「S」は「シグナル」(Signal)の頭文字、「N」は「ノイズ」(Noise)の頭文字を示すと述べているが、古橋は《S/N》においてシグナルとしても、ノイズとしても機能し、そのことが《S/N》を当時の社会的文脈において有効に働かせる要因となっていた。第一に、カミング・アウトの場面において古橋はいくつかのカテゴリーによって自己を固定化せず、同時に混沌の状態へ移行しないように意味の領野へつなぎとめる役割を果たしていた。第二に、《S/N》創出に寄与した一主体としての古橋悌二は、《S/N》の場面の選定および順序を決め、プロットや台詞において一貫した意味を伝達するように統合する存在としてありつつ、同時に集団的創作における集団という同質性に対して他者性・異質性を混入する存在でもあった。このように、古橋がノイズとして流動化しつつシグナルとして固定化するという微妙な調整機能により、《S/N》は集団的創作やカミング・アウトの実践における新たな可能性を拓いていることが明らかとなった。